

# 森を走ろう 2015 シンポジウム

～ 鍋木 毅 所見～

現在、トレイルランニングが抱えている課題は主に 2 点あると思っています。一つは、「愛好者のマナー・ルールの問題」。愛好者の人口の拡大とともにこの点の周知が追いついてゆかないのが現状とします。従来の挨拶をする、トレイルを外さないなどの基本的な事項に加え、トレイルランニングならではのもの、例えばハイカーを追う抜き時などの対応や、ハイカーが多くいるであろうフィールドや時期、時間帯などを考慮するなどの対応など近年多くの配慮しなければならない点が多く、この辺までも含めた啓発が必要と思います。

二つ目は、「レースの問題」。大会を開催する上で必要な許可や地元への周知を怠っている大会や、安全なレースを運営するための体制が明らかにできていない大会、明らかに大会の規模を越えた参加募集をする大会など杜撰な運営の大会が増えているように思います。こういった大会を開催することは社会的に問題があるだけでなく、このスポーツの価値を低めてしまう結果となってしまいます。

大きな盛り上がりを見せるトレイルランニングですが、社会的な風当たりは依然強く、このスポーツに対して好ましく思っていない方々も多いのも現実です。小さな過ちも、とかく大きく捉えられがちが風潮となっています。

一人一人の愛好者、そして大会主催者の責任感を持った行動・対応が必要と思っています。

私が提案したいのはこのスポーツを実施することで社会的メリットが出てくるような流れをつくること。例えば、大会とともに実施するクリーンアップ活動やトレイルづくり、また自然環境保護への働きかけや寄付や基金をつくること。そして、地元の方々を巻き込み地域を盛り上げるような流れをつくることこそが最も必要と思います。

トレイルランニングはロードレースやサッカー、テニスといった多くのスポーツが囲われた空間で実施されるのとは異なり、レースの時さえ常にトレイルの共有者を意識しなければならないという特殊なスポーツであるからこそこのようなことがとりわけ必要になるのです。

最後に協会について一言。

協会をつくることは必要なことですし、あるべきと考えます。

ただ、上記のような課題を解決できるものでなければなりませんし、このスポーツに関わる多くのキーマンを含み、かつ民主的なステップをとる必要があると思います。「つくってみたものの機能せず」このようなものではあってはならないと思います。

とはいえ手を拱いては何も始まらない、今年はいろいろな意味で大きな一年にしてゆきたいと思っています。

鍋木 毅

## これからのトレイルランの方向についての意見

村松達也 岡山スポーツフォーラム代表  
(日本トライアスロン連合、元中国ブロック理事)

昨年の当シンポジウムでは、「自然ランニングスポーツを多くの人と共有し、連携する道を探る」というテーマでしたが、各大会の事例発表という域を出なかったように思います。

あれから、一年、皆さんの中では前回のテーマが熟成され、今年は次の段階「組織の設立」に意識が移りつつあると思います。社会の理解を得、社会の中でトレイルランの存在意義を考えるためには、組織の設立は避けて通れない課題だと思います。

では、誰が、その組織主体となるのでしょうか。

現状、UTMBやワールドサーキットなど特定の企業や、大会を中心とした動きが世界を席卷しています。それはそれで発展という意味では重要な動きなのでしょうが、それは企業活動として、あるいは大会主催者が開催を目的として、の動きなわけです。

大切なことは、われわれランナー自身がトレイルランをどう考えるか、ではないでしょうか？自然の中を走る喜びを知る人間なら、その自然を守ることや他者と喜びを分かち合うことは、もっとも重要なことだと思います。新しい道具や、大きな大会のもつ魅力は大きいでしょう。が、健康で安全であること、自然の中で走れる充実感、大会での達成感、人とのふれあい、これらすべてを同等に考えてゆかないと、このスポーツの本質をゆがめてしまいます。

今の、トレイルランの流れはこれでいいのでしょうか？

個々の大会がバラバラな基準で参加者数や環境への対応を決定し、毎月のように新しい大会が生まれて行く、多くのランナーの関心は次の大会のことばかり。トレイルランは大会や競技という側面からだけで成り立っているものでないことは皆さんがご存知のことでしょう。現在、各地で読図や安全のための講習会が行われていますが、参加するのはごく一部のランナーのみ。安全やマナーの教育、環境への配慮など、大会に参加する前にスポーツマンとして知っておくべきことを、どう普及してゆくのか。大会での安全基準をどう作ってゆくのか、社会への還元をどう行うのか。これらを考え、実行し、リードしてゆく組織が、今すぐにでも必要です。皆さんも、そうお考えだと思います。

かつて私はトライアスロンの日本組織の立ち上げに携わっておりました。トライアスロンは、トレイルランと同様にアメリカに生まれ、日本や世界に広がったスポーツです。当初、日本に二つのトライアスロン組織がありました。ショートスタンダード大会を中心とした組織と、それ以外のロング等大会を中心とした組織の二つです。トライアスロンは大会を開催することで発展したスポーツで、これら二つの大きなグループが対立し並立していました。どちらの組織にも企業や利害関係が別に存在していたためです。しかし、大会は道路を使用するため、警察の許可を受けないと開催できないという理由で、その存立のために合併しましたが、そのためにとても多くの時間と労力が必要でした。

私は、トレイルランがトライアスロンと同じ轍を踏む方向に進むのではないかという危惧を持っています。トレイルランが面している現在の課題は、社会の理解という意味では、トライアスロンにおける警察と同じように思えます。利害関係のある企業や、大会主催者の意見も大切ではありますが、大切なことは、トレイルランナー自身が、今までの歴史や発展の過程を振り返り、発生から進歩への過程を学び理解し、将来に向かってその本質を守ってゆくことではないでしょうか？

つまり、大会や企業やその他の既存組織から独立した、トレイルランナーによる組織を作るべきではないかと思っています。大会開催優先の組織であったり、企業べったりの組織であってはならないと思います。大会のあり方を監視し指導し、企業の動向にもアドバイスできる、そういう自立したトレイルランナーの集合体であってほしいと思います。そのために、すぐにでも取りかからないといけない問題は山積しています。

これからのトレイルランを作ってゆくのは、企業や大会ではなく、ランナー自身なので、ランナーの組織を立ち上げることが、今、必要なのではないのでしょうか。